

追悼

## 永安先生追悼

岩佐 信道

私が永安教授に初めてお目にかかったのは、昭和四十七年、モラロジー研究所研究部に就職した年の研究会の席であった。先生は、当時は、高崎経済大学におつとめであったと思う。そして、経済経営研究室の연구원でもあったが、その後研究室長になられた。その頃のことによく思い出すのは、先生の研究室の入り口にはってあった「月給泥棒になるな」という紙である。当時、研究部には、ゴルフの好きな人が何人もいて、キャンパス内のショートホールのゴルフ場でプレイしていた。「研究部員は、机に向かうばかりでなく、時には運動をしなければ体に悪い」などと自分たちに言い聞かせながらプレイしていたが、ゴルフをした後や翌日には、この張り紙が特に気になったものである。

このような張り紙を掲げた永安教授自身は、研究センターのために命がけの仕事をされた。私は、平成十七年にセンター長になったのであるが、その四年前までセンター長であった永安教授には、研究センターの研究主幹というお立場でご指導をいただいた。しかし先生は、平成十八年に研究所の定年である六十五歳になられた。私は、研究主幹を続けていたきたい、との希望をお伝えしたのだが、「いや、客員教授の立場

で」とのことであった。研究センターの定年後の客員教授の給与は、誠に微々たるものであるが、研究センターにおける最晩年の先生は、総合人間学としてのモラロジーの前進のために、給与の何倍、何十倍もの仕事をされたと思う。この点を私の知っている範囲で記すことによって先生への御礼にかえたいと思う。

永安教授は、平成四年の麗澤大学の国際経済学部設立に重要な役割を果たされた。そして、その国際経済学部が軌道に乗り、一段落した平成七年には、モラロジー研究所研究部長を兼ねられることになった。当時、研究所では、モラロジー研究所の二十一世紀のあるべき姿が真剣に検討されており、創立七十周年に当たる平成八年には、廣池幹堂理事長がグラランド・デザインを発表された。これは「モラロジー研究所が二十一世紀において日本と世界にとってなくてはならない存在たらんとする「志」を実現するための大目標」であった。その第一の柱には「世界の道徳の研究およびその成果の発信、ならびに道徳に関する研究者の国際的なネットワークの基地をめざす」ことが掲げられた。そして道徳科学研究センターにおいては、(一)総合的学問としてのモラロジー研究、(二)道徳に関するデータベースの構築、(三)社会的諸課題への取り組み、の三項目のもとに、具体的な研究活動が列挙され、以後の研究センターの事業計画の基本方針となっている。

永安教授は、それから平成十三年までの六年間、研究センター長として、このグラランド・デザインの線に沿って研究センターの活動を大きく前進させられた。そして平成十四年に北川教授がセンター長を引き継がれ、平成十七年に私自身がセンター長になった後も、永安教授は研究主幹として、大局からセンターの方向づけに大きな力を発揮された。むしろ、グラランド・デザインに示された研究活動の基本は、十年かけて、永安教授によって、確実に前進したといってもよいであろう。研究というものは、一年や二年ですぐ形になる

ものではなく、必ず長年の地道な研究の積み重ねの末に初めて可能なものであるということを目の当たりにしたように思う。

たとえば、『総合人間学モラロジー概論』である。これは、最初、生涯学習講座のテキストとして長年使用されてきた『モラロジー概説』に代わるテキスト（『要説』という仮称）として、その編集が研究所の重要な課題となっていた。北川委員長のもとに委員会が発足し、私も、委員の一員として参加させていただいたが、早い段階での永安教授の発言は、その善アプルーチといい、独特の義務先行論といい、当時の委員会の他のメンバーにはなかなか理解しにくいものであったように思う。少なくとも、講座のテキストにそのまま使えると思った委員は少なかったように思う。それが、永安教授の命がけの執筆によって最終的に『概論』という形になったのは、平成十九年であった。平成七年に研究部長になられた時から数えれば、十年以上の年月がたっている。その間、研究センターにおけるお立場は、センター長、研究主幹、客員教授と変わったが、まさに十年一日のごとく、総合的学問としてのモラロジー研究にとり組まれた成果といえることができる。

この執筆はモラロジー研究所の道徳科学研究センターの仕事と考えられていた永安教授は、できあがった原稿を、その都度、センター長という立場になった私のところにもって来られた。永安教授としては、「この原稿は、かなりの部分、自分が書いたとしても、研究所のテキストとなるからには、センター長をはじめ、多くの人々の英知を結集したものにしたい。したがって、気づいた点は是非指摘してほしい」とのお考えであったと思う。しかし、永安教授が書かれた原稿は、教授独自の観点から立論されたものが多く、そこには一つの個性的な統一があるように私には思われた。したがって、たとえ私に、それとは異なる自分の考

えがあったとしても、足して二で割るような加筆はできなかった。相互依存の観点から文章を書き足して欲しいと言われた部分には、何方所も書き加えたものの、永安教授の文章に手を加えることはなかなかできなかった。教授のお考えはよくわかっていただけに、今ではそのご意向に十分そえなかったことを心から申し訳なく思うものである。いずれにしても、『総合人間学モラロジー概論』は、永安教授が、グラント・デザインに示された研究センターの第一の課題としての「総合的学問としてのモラロジー研究」に十年一日のごとく没頭された成果といえるのではないかと思う。もちろん、現在の形になるまでには幾多の変遷があり、そこには、私の知らないところで多くの人々の数知れない協力やご苦労があったことは言うまでもないことであるが。

グラント・デザインにおける研究センターの第二・第三の課題、すなわち「道徳に関するデータベースの構築」と「社会的諸課題への取り組み」についても、永安教授は大きな力を発揮された。それは、『倫理・道徳の白書VOL・I』の刊行である。これは社会的諸課題としての環境倫理、医学倫理、企業倫理等の各領域別の倫理・道徳問題について、意識調査ではなく文献を駆使して「道徳白書」にまとめた画期的なものである。これには、永安教授のリーダーシップのもと、センターの各分野の研究員の力が遺憾なく発揮された。国の機関で仕事をしていたある人物は、この本が、現代社会の最先端の諸問題を倫理道徳の観点から取り上げていることを高く評価し、数十人のメーリングリストの仲間いち早くそのことを知らせるメールを送り、そのコピーを私にも送ってくれたことがあった。

また、これは永安教授がまだセンター長であった二〇〇一年秋のことであるが、「グローバル時代のコモンモラリティの探求」をテーマとする「モラル・サイエンス国際会議」が計画された。ただし、この計画

は、アメリカ、ニューヨークでの同時多発テロの勃発によって翌年に延期となり、後を受けてセンター長となられた北川教授によって見事に実現した。これは、まさに、道徳に関する研究者の国際的なネットワークの構築に向けての大きな前進であった。もちろん、永安教授は、海外からの重要な参加者の招聘や、コモモンラリテイという中心概念を明確にするうえで重要な役割を果たされた。

このように見てくると、廣池千九郎博士によって創立されたモラロジ研究所が、二十一世紀を目前にして、「日本と世界にとってなくてはならない存在たらしめる志」の表明としてのグランド・デザインは、研究分野に関するかぎり、まさにその衝に当たっておられた永安教授によってしっかりと受け止められ、その線にそって約十年をかけて確実に前進したということができるように思う。その意味で、平成十七年にセンター長となった私にとって、永安教授をはじめ多くの先輩部長、センター長が、長年にわたって積み重ねて来られた努力の果実を享受させていただいているように思う。

ところで、研究者の国際的なネットワークの構築という点では、二〇〇五年に、服部研究主幹の活躍により、道徳科学研究センターが、ユネスコ、国際日本文化研究センターとの共催で開催した国際シンポジウムも特筆すべきであろう。私は、この国際シンポジウムの後、次は是非、廣池千九郎とモラロジに焦点を当てた国際会議を開催したいとの希望を表明した。これは、私がセンター長に就任した直後から、センターのホームページで明らかにしていることでもある。現代世界の多様な価値観や道徳に見られる共通性、すなわちコモモンラリテイの探求や、多様な文化に通底するものを求める姿勢ももちろん重要であるが、我々道徳科学研究センターのもう一つの責任は、モラロジの確立に生涯をかけた廣池千九郎の意図、願いを世界の人々に伝えることであるというのが私の考えであった。永安教授は、私のこの考え方に強い支持を表明して

くださった。「うん、センター長、その線がいいと思う。一般的なことに力を注いでもあまり意味はない。ただ廣池千九郎博士に焦点を当てていく場合、英文の『道徳科学の論文』と『伝記』だけでは十分ではない。博士の『日記』がどうしても必要になる。是非『日記』の英訳を進めるべきだ。それには、『伝記廣池千九郎』の場合と同じように、カリフォルニアの前田さんのところに下訳をしてもらうのが早い。常務さん方に支援してもらえばいい。」との懇切な助言であった。

廣池千九郎のモラロジーにおける業績に焦点を当てた国際会議が二〇〇九年夏に開かれることになっているが、『日記』の英訳については、まだ緒についていない。私はいろいろな機会に、その英訳に言及しているのであるが、まだその体制が整ってはいないのである。永安教授に早く安心していただき、ご恩に報いるためにも、ご助言いただいた『日記』の英訳を早急に具体化していきたいと思う。

永安教授は、廣池理事長のお心にしたがって、十年一日のごとく努力を積み重ねた方であった。国際比較文明学会の会長も務められたイリノイ大学名誉教授、パレンシアアールス先生は、すでに四回モラロジー研究所を訪ねられ、モラロジーと廣池千九郎に大きな関心を抱いておられる。現在、研究センターの顧問であるが、二〇〇八年秋のセンター滞在中に、お互いの話題が永安教授のことに及んだことがあった。私は、永安教授の広く深い学識と熱い情熱を思い、もしご健在なら、教授との対話を通じて、パレンシアアールス先生にも、モラロジーについてどれほど深い理解をもらえたであろうか、と思わざるをえなかった。そして私は、永安教授のことを思わず「スモール チクロー ヒロイケ」と評したのである。パレンシアアールス先生からは、「それはものすごい賛辞だ」との言葉が返ってきたのであるが、私の中の永安教授のイメージは、廣池千九郎博士と重なる部分がある。廣池千九郎博士の業績に焦点を当てて開かれる夏の国際会議に永安教

授がご健在で、ご参加いただけたら、との思いがこみ上げてくるのを禁じ得ない私である。